

書 評 REVIEWS



Catherine DELAFIELD,
Serialization and the Novel in Mid-Victorian Magazines
(x+212 頁, Ashgate, 2015 年)
ISBN: 9781472450906

(評) 中和彩子
Ayako NAKAWA

本書は、イギリスで 19 世紀半ばに発表された連載小説を掲載誌というももとのコンテクストに置いて読み直す試みである。著者はジェラルド・ジュネット (G rard Genette) の「パラテキスト」の概念を援用して、小説テキストとそれを物理的に取り巻く諸テキストとの複雑な関係に焦点を当てる。それはつまり、連載という出版形態、さらには雑誌というシステムを解明することでもある。

著者自身はイントロダクションにおいて本書の目的を次のように説明する。

This study addresses the influence of the material conditions of production and reception, illustrating the collective and collaborative creation of the novel and of the periodical. Analyses of the periodical's structure, their language, illustrations, competing discourses and intertextual impact are the means of interrogating the novels in their contemporary context. This book reads, restores and rereads a range of texts as part of the nineteenth-century experience of print. (2-3)

このうち、作家・編集発行人・出版社による「合作としての [連載] 小説および雑誌」のありようは第 2 章～第 4 章を通じて示される。「雑誌の構成、その言語、挿絵、対抗しあうディスコース、インターテクスチュアリティの効果の分析」が試みられるのは主に第 5 章においてである。そして最終章 (第 6 章) では、連載小説を、「その後 (afterlife)」すなわち単行本や雑誌の合本と比較しつつ、連載出版の意味づけを行う。

以上の議論の出発点となる第 1 章は、19 世紀における“serialization” (雑誌連

載・分冊出版) について、そして中心的に扱う 5 作品とその掲載誌について概観し、最後に一セクション (15-22) を割いて挿絵についての理論的、出版史的な説明を加えている。

扱われる 5 作品, Elizabeth Gaskell, *Cranford* (*Household Words*, 1851-53), Anthony Trollope, *Framley Parsonage* (*Cornhill Magazine*, 1860-61), Dinah Craik, *Mistress and Maid* (*Good Words*, 1862), Wilkie Collins, *The Moonstone* (*All the Year Round*, 1868), Wilkie Collins, *Poor Miss Finch* (*Cassell's Magazine*, 1871-72) は、次の理由で選ばれている。

The novels in this study have been chosen because of their origins as serials in the context of magazines. *Cranford* was an unplanned, incidental serial; *Framley Parsonage* and *The Moonstone* were planned but written by authors with very different experience of serialization; *Mistress and Maid* and *Poor Miss Finch* were targeted at a specific magazine audience. This selection is inevitably based on *post hoc* factors which have made the texts significant both in themselves and as works representative of the careers of their authors. (14)

こうして本書ではジャーナリスティックな *Household Words*, 娯楽小説や教育的な記事を載せる *Cassell's Magazine*, 小説中心の *Cornhill Magazine*, *All the Year Round*, 宗教雑誌 *Good Words* と、多様な家庭向け週刊・月刊誌が取り上げられている (13)。

以上のように、本書の枠組みはヴィクトリア朝の雑誌に関する先行研究を踏まえた興味深いものである。しかし、具体的な例証やテキスト分析 (第 2 章～第 5 章) については疑問を覚えるところが多かった。

例えば、*Cornhill Magazine* の寄稿者たちの間で生じた「相互作用/ 影響 (interaction)」の例証 (34)。トロロープのこの雑誌へのアプローチには、他の記事のスタイルが反響していると、著者は論じる。トロロープが『フラムリー牧師館』連載第 1 回において、登場人物の描写をなるべく省略するという姿勢を示し、第 4 回において、ある登場人物の描写を「なしで先に進められればいいのに」と嘆くのにに対して、サッカレー (Thackeray) は ‘The Four Georges’ の第 3 回において、登場人物のカatalog を読むだけで講義時間が終わってしまうと述べる。またジョージ・サラ (George Sala) は「私は街ばかりか、歳月も行きつ戻りつしている」と記述方法への自意識を語っている (‘William Hogarth’ 第 3 回) が、Miss Dunstable のパーティの場面で登場人物たちを動かすトロロープは、まず「Lady Lufton が

控えの間で我々を待っている」と告げ、やがて Miss Dunstable のところに戻って「彼女をこんなに長時間放っておくべきではなかった」と述べる。以上を受けて、寄稿者たちの「相互作用/影響」により「擬似的な統一性 (false unity)」が生まれているとする (34) のは、論証としては不十分であろう。ヴィクトリア時代において、こうした表現はこの雑誌に掲載された小説やエッセイに限らないからだ。

また、雑誌に出てくる言及や図像を横断的に拾って関連づける手法自体が悪いわけではないが、本書における実践は総じてうまくいっていないようだ。『克蘭フォード』をめぐるコンテクストと「共鳴 (resonances)」を浮かび上がらせる試み (97-99) に注目してみよう。「連載第 1 回」といえる ‘Our Society in Cranford’ において、ジェシー・ブラウンが、商売を営む「おじ (my uncle)」の話題を持ち出す場面と、前号の巻頭記事 ‘My Uncle’ (質屋) とは関連を持たされているのだろうか？ ‘A Love Affair at Cranford’ を載せた号の巻頭記事 ‘Pearls from the East’ が、はたして「のちに、2 年近く後の雑誌において [サム・ブラウン一家] のインドでの冒険と、ピーター・ジェンキンズの帰還の両方と共鳴する」といえるのだろうか？

図像の分析についても同様の違和感がある。著者は、多彩な言説の縫り合わさった *Cornhill Magazine* の枠内で、挿絵を通じてパターンが生み出されていたことを例証する中で、ベッドに倒れ伏す女性の図像 (『フラムリー牧師館』の挿絵 ‘Was it not a lie?’ (1860 年 6 月)) と、岸に這い上がろうとするイモリの図像 (連載 *Studies in Animal Life*, 1860 年 3 月) を見開きで並べる。クリノリンで膨れた襷たっぷりのドレスと、イモリの背中 of 盛り上がりはたしかに似ていなくもなく、楽しい発見ではあるが、これらの図像の呼応によって、動物研究に匹敵する人間研究が生み出されているとする解釈 (113-115) は、さすがに牽強付会ではなからうか。

もう一つ『克蘭フォード』の分析を見てみよう。同作の連載が置かれたコンテクストの一つは次のように説明される。

... [*Cranford's*] serial intentions became clearer in the later instalments but during the appearance of the original sketches, Gaskell's novella in serial form interacted with a range of other material including Dickens's *A Child's History of England* and a number of non-fictional articles which echoed other fiction including the novels *Oliver Twist* (1838) and *Nicholas Nickleby* (1839). The patterns of references to seafaring, to empire and to emigration contextualized Peter Jenkyns's disappearance and reappearance in *Cranford*. ... (94)

集会的な作者たちが生み出した雑誌を一つのテキストと捉えて、そのテキスト内部(小説テキストにとっては外部)の分析を行う以上、とりあえず上記のような解釈が導き出されるのは当然だろう。とはいえ、より大きな文化・社会的コンテキストが、本書を通じて全く参照されていないのも不自然である。*Mistress and Maid*と『フラムリー牧師館』が非常に性格の異なる雑誌(というコンテキスト)に置かれているのにもかかわらず「安息日の厳守や、南海への言及といったテーマを共有」しているという指摘(120)や、*Mistress and Maid*の「死の床」の挿絵と相前後して、同じ画家が別の雑誌に、別の画家が同じ雑誌に似た挿絵を描いていたことを根拠に、小説にインターテクスチュアリティが与えられるとする指摘(131)は、同時代のディスコースすなわち雑誌そのものが置かれていた広汎なコンテキストを無視しないと成り立たないものである。

言語や図像の分析が印象に傾きがちなもの気になる。例えば前述の「死の床」の挿絵に共通しているのは、実は、親しい一人の人間だけがひっそり見守るというモチーフのみで、図像として似ているとは言い難い。また、*Household Words*のエッセイ‘What I Call Sensible Legislation’から、「出版物の賢明な監督が必要」と説く一節を引用した直後に「これは当時、雑誌と連載記事の両方を監督・指揮していた編集発行人ディケンズの影響力を反映している」(78)とするのは飛躍だろう。

興味深い分析もあった。*Poor Miss Finch*のテキストと挿絵(Edward Hughes)を、同時期に掲載されていた詩の挿絵(Mary Ellen Edwards)との関係において見るセクションの、特に後半部分(156-160)だ。それによれば、表題主人公のルシラ(Lucilla)の存在の矛盾(同情を買う存在だが、何の不自由も覚えずに生きている)を、それぞれ小説の挿絵(伏し目の慎ましいルシラ)と、同じ号の詩に添えられた女性像(大胆にも読者を直視する)が引き受けている(156)。治療により目が見えるようになったルシラが小説中初めて自分の言葉で語るくだりにおいても、挿絵のルシラは読者を直視することは許されず、代わりに雑誌の他の箇所でも描かれた女性たちがルシラの変化を代弁するのだ。しかしルシラが再び視力を失う号では、詩の挿絵の女性は目を伏せており、小説の挿絵のルシラは、詩の女性と全く同じ向きと姿勢で同じく従順に腰掛けている。

ただし、以上のインターテクスチュアリティの考察の最後では、技法(technique)という語を通して作り手の意図の存在が示唆される。

The illustrations and poems in the *Magazine* during the serialization of *Poor Miss Finch* demonstrate the technique of using intertextuality to reinforce respectability

whilst allowing the *Magazine* to participate in the sensational trend. Hughes's illustrations for *Poor Miss Finch* were used to distract from or defuse the sensation of the serial but the Edwards women restored some of the dangerous elements of the sensation heroine in a technique which has been described as 'interpictoriality' or 'adjacency'. . . . (159; 強調下線は引用者)

この箇所典型的に見られるように、本書は、集合的な作者たちの意思がテキスト(連載小説・雑誌)に複雑に作用するさまを解明しようと試みる一方で、連載小説・雑誌のインターテクスチュアリティを捉えようともする。多様なアプローチが一冊の研究書に混在しているのは、雑誌というそれ自体多様性を備えた対象を扱う際にはむしろ必然なのかもしれない。

本書は、雑誌という複雑な媒体を単純化せずに論じようとする困難さと意義の両方を示した労作といえよう。